

ネギアザミウマの簡易薬剤感受性検定法

○溝部信二・中川浩二（山口県農林総合技術センター）

山口県では、施設アスパラガスにおいて、ネギアザミウマが多発生して擬葉や若芽を食害し、品質や収量の低下が問題となっている。このため、薬剤防除が実施されているが、最近では、防除効果の低下した事例がみられており、抵抗性の発達が疑われている。しかしながら、微小で飛翔性のあるネギアザミウマは取り扱いが難しく、現場での薬剤感受性検定は困難である。そこで、ネギアザミウマを対象に、簡易な薬剤感受性検定法を考案したので報告する。

<方法>

(1) 材料及び供試薬剤

試験には 2013 年 11 月 27 日に下関市の施設栽培アスパラガスで採集したネギアザミウマの雌成虫を供試した。供試薬剤はペルメトリン（アディオン乳剤 2000 倍）、スピノサド（スピノエース水和剤 5000 倍）、アセタミプリド（モスピラン水溶剤 4000 倍）とし、対照として蒸留水区を設けた。薬液及び蒸留水には展着剤（マイリノー5000 倍）を加用した。

(2) 試験方法

検定は食餌浸漬法により行った。厚さ 2 mm にスライスしたソラマメ催芽種子及びアスパラガス擬葉（長さ約 5 cm）を常用濃度の薬液に 10 秒間浸漬し、風乾した後に蒸留水で湿らせたろ紙（5 cm × 1 cm）とともに、チャック付きポリ袋（株）生産日本社製ユニパック B - 4 85×60×0.04 mm）に入れた（図 1、2）。電動吸虫管を用いて供試虫をポリ袋に入れた後、チャックを閉じて密封した。供試虫数は各区 10～22 頭とし、処理後は約 25℃ の室内で保管した。24 時間後と 48 時間後に実体顕微鏡下でポリ袋の上から柄付き針で供試虫を刺激し、生死を判定した。苦悶虫は死虫に含めた。処理は 3 反復とした。

<結果の概要と考察>

ソラマメ催芽種子浸漬法、及びアスパラガスの擬葉浸漬法とも 48 時間後の対照区の生存虫率は高かった。3 種薬剤の生存虫率は両方法で同様の傾向を示し、薬剤感受性の検定に使用できると考えられた（図 3、4）。

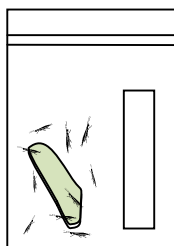


図 1 ソラマメ催芽種子浸漬法

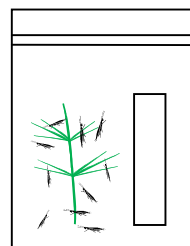


図 2 アスパラガス擬葉浸漬法

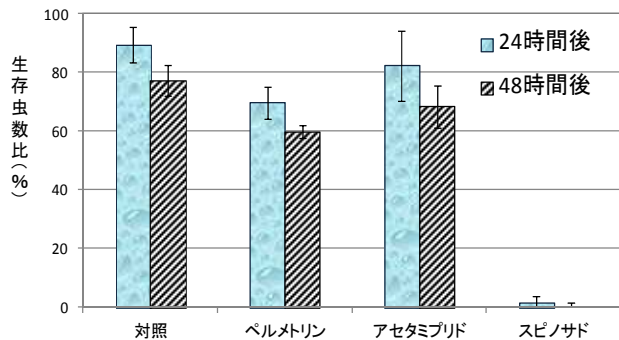


図 3 ソラマメ催芽種子法での生存虫率

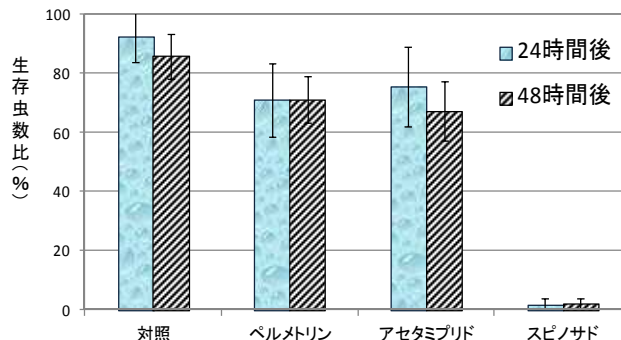


図 4 アスパラガス擬葉浸漬法での生存虫率